

学寮生活に於ける態度変容

篠原しのぶ

問 題

大学教育における学寮の意義としては経済的にめぐまれない学生に対する援助としての厚生施設であるという面と、集団生活における人間関係を通して行われる全人教育の場であるという面とを考えることができる。しかし、戦後20年を経て宿舍難も可成り緩和された今日においては、物的環境の整備という面よりは全人教育の場としての学寮の意義が強調されねばならないと思われる。したがって、学寮を学生のための全人教育の場として、より効果的なものとするためにも、学寮生活に関する科学的調査研究の必要性を痛感する。

学寮は、年令的・知識的・情緒的に共通性の多い学生が起居を共にする集団共同生活の場であり、大学生の生活環境の中でも特異なものである。本研究は、この学寮生活の実態をとらえ、学寮が大学生生活の生活環境としていかなる教育効果をもつものであるかをあきらかにするために、Fスケール(権威主義的態度尺度)を用いて、学寮生活における大学生の社会的態度変容の実態と変容の要因を解明しようとしたものである。

尚、この調査は九州大学教育学部三隅二不二教授御指導のもとに、九州大学学生部厚生課寮務掛長佐藤信茂氏と共同しておこなった調査研究結果の1部をまとめたものである。

調査手続

1. 調査対象

九州大学専門課程男子学生寮(四寮)の在寮生全員(102名)中被調査者93名(回答率90.3%)

被調査者中、入学当時の新入生調査と比較可能な4年生42名。

2. 調査方法

学寮生活における学生の意識および態度行動をとらえるために作成した調査表に、新入生調査に実施されたFスケールを組み込んだ質問紙を用いて、調査員が寮を訪問し、個人面接による調査を実施した。尚、調査期間中の不在者には、質問紙を郵送して回答を求めた。

3. Fスケール

Fスケール(権威主義的態度尺度)は、Adorno, T. W, Frenkel Brunswik, E. 等によって考案された権威主義的人格(Authoritarian personality—弱者に対し支配的、強者に対し服従的な、非民主的・潜在的・前ファシストの傾向を示すパーソナリティ)を測定するスケールである。今回の調査に用いたFスケール(今後 F_2 と表す)は、新入生調査に用いた30項目からなる浜田・藤沢版(1961)(今後 F_1 と表す)は、

と表す)を更に因子負荷量の高い20項目に短縮したものである。(尚、 F_1 、 F_2 の得点の比較は、共通の20項目について行なった。)

これは、各項目の短文について「非常に賛成」から「非常に反対」までの六つの評定で賛否の態度をチェックさせ、これらの評定に、+3から-3までの得点を与え、これを合計して各人のF得点を得るというものである。プラスの得点は more authoritarian で、マイナスは non (or less) authoritarian であると解釈する。このFスケールには、A、権威主義的服従、B、迷信とステレオタイプ(二分法的考え方)C、非科学性、D、権威主義的攻撃性(外罰的傾向)の四つの因子が含まれており、その得点が高いほど、これらの特性が大きいことを示すものである。

結果及び考察

1. 寮生と一般学生のF得点

Table 1. は、4年生の現在のF得点(F_2)と入学時の得点(F_1)とを比較して示したものである。寮生と、寮生を除いた一般学生とにわけてみたが、いずれも、入学時から卒業時までの4年間に、有意な差で大巾な下降を示している。即ち、非権威主義的な方向へ、(例えば、権威に対する無批判な服従的態度から自由な批判的態度へ、迷信やステレオタイプの考え方から脱却して、より科学的な態度へとといった、いわば、より民主的、より反ファシズムの方向へ)態度変容がおこっているということが出来る。殊に、寮生の方は、4年間でマイナスの方に15も下降しており、一般学生の0.62に比し二倍以上もの大幅な下降変化を示している。

Table 1. 4年生のF得点平均

寮 生		一 般 学 生	
F_1 (入学時)	F_2 (卒業時)	F_1 (入学時)	F_2 (卒業時)
+ 0.50	- 14.50	+ 0.75	- 5.27
P < 0.001		P < 0.001	

入学時と卒業時のF得点の変化のしかたを詳細にするために、 F_1 F_2 夫々の平均値とSDとによって各標本を四段階に区分した。Table 2 は、 $F_1 \cdot F_2$ の段階区分と4年寮生の $F_1 \cdot F_2$ 得点の分布状態を示したものである。入学時には高得点群即ち+9以上のFスコアをとったものが21.4% (9名)であったのが、卒業時(F_2 では+3以上)には4.8% (2名)に減少しており、入学時に低得点群、即ち-7以下のFスコアをとったものは26.2%であるのに対し、卒業時(F_2 では-15以下)には、45.2% (19名)に増加している。又、入学時は、各得点群間に有意な差がみられなかったのが、卒業時には非常に有意な差で、高得点群より低得点群の方が多くなっている。つまり、入寮を希望する学生が、始めから非権威主義的傾向の持主であるというのではない。最初は一般学生と同様であったものが、寮生活をしているうちに、態度

変容をおこしたとみることができる。

Table 2. 4年寮生のF得点分布

F ₁ (入学時)			F ₂ (卒業時)		
得点群	段階区分	%	得点群	段階区分	%
④高得点群	F ₁ ≥ +9	21.4	④高得点群	F ₂ ≥ +3	4.8
③中高々	+9 > F ₁ ≥ +1	38.1	③中高々	+3 > F ₂ ≥ -6	26.2
②中低々	+1 > F ₁ > -7	14.3	②中低々	-6 > F ₂ > -15	23.8
①低々	-7 > F ₁	26.2	①低々	-15 > F ₂	45.2
有意差なし			X ² =14.0 P<0.01		

Table 3は、F得点の段階的变化状態について、寮生と一般学生とを比較したものである。ここで上昇群というのは、F₁よりF₂の得点段階が上昇した被験者群(F₁の時、低、中低、中高群に属していたものが夫々、中低、中高、高群のいずれかへと上昇したもの)であり、不変群は、F₁・F₂における得点段階が同じであるもの(得点としては例えばF₁=+8, F₂=-3で下降しているようであっても、段階としてはF₁・F₂とも「中高群」に属しているというような場合)をさし、下降群は、F₁よりF₂の得点段階が下降した被験者群(上昇群の反対の現象)を示したものである。

Table 3. 寮生と一般学生のF得点段階変化

F ₂ - F ₁	寮 生	一般学生
+ (上昇群)	9.5% (4)	39.9% (92)
0 (不変群)	26.2 (16)	42.1 (114)
- (下降群)	52.4 (22)	24.0 (65)

有意 $\chi^2=4.69, P<0.05$

一般学生について見てみると、Table 1においては非常に有意な差でF得点下降現象がみられたのに、Table 3の段階変化では、むしろ下降群より上昇群の方が多くなっている。これに対して寮生は、F得点そのものの下降現象は勿論、Table 3の段階変化においても亦、明らかな下降変化を示している。即ち、上昇変化を示したものはわずかに9.5% (4名)しかなく、下降変化を示したものはこれの5倍半にあたる52.4% (22名)を占めているのである。従って以上の結果から、寮生の方が一般学生に比してF得点下降変化がいちじるしいということが出来る。

2. 態度変容の要因

以上のことから、学寮生活は大学生活の中でも特に、非権威主義的方向への態度変容をもたらしていることが明らかになった。ところで、何が寮生の非権威主義的方向への態度変容に大きな影響を与えているかを究明することが、学寮のもつ教育的効果

を考へる上に必要であると思はれる。そこで、学寮生活に関する寮生の意識および態度行動とF得点変化との関係をみてみよう。

(1) 寮内の交友関係

まず学寮の凝集性との関係をみるために、ソシオメトリックテストによる各寮の凝集度をみたところ、Table 4 のような結果がみられた。

Table 4. 学寮の凝集度 (ソシオメトリックテストによる)

寮	A 寮	B 寮	C 寮	D 寮
同寮生選択数	0.182	0.333	0.526	0.565
友人選択総数				

A・B寮とC・D寮間有意 $P < 0.01$

即ち4寮のうち、AとB、CとD寮それぞれの間には統計的に有意な差がみられなかったが、AB寮とCD寮の間には1%以下の有意差がみられた、そこで、凝集度の低いAB寮と、その高いCD寮とにわけて、F得点変化をみた結果、Table 5 に示す通りであった。凝集度の低い寮には上昇、不変群がやや多く、凝集度の高い寮には、下降群がやや多いようであるがこれは統計的には全く有意でない。したがって学寮の凝集度とF得点変化の間には関係がないということが出来る。

Table 5. 学寮の凝集度とF得点段階変化

凝集度	低い寮 (A・B)	高い寮 (C・D)
F ₂ -F ₁		
+0 (上昇・不変群)	57.1 %	42.9 %
- (下降群)	42.9 %	57.1 %

有意差なし

Table 6 は、寮内に非常に親しい友人 (いつも行動を共にしたり、よく話をしたり、親友とよべるような友人) が何人いるかという問による寮内の交友範囲とF得点変化との関係を示したものである。親しい友人の数が2人以下のものは、上昇・不変群に属するものが多く、3人以上のものは、下降変化を示したものが多くなっており、統計的にも非常に有意な差が出ている。即ち、寮内交友範囲の広さが、非権威主義的方向への態度変容に関する一つの要因であるということが出来る。

Table 6. 寮内交友範囲とF得点段階変化

寮内友人数	2人以下	3人以上
F ₂ -F ₁		
+・0 (上昇・不変群)	62.1 %	23.1 %
- (下降群)	37.9 %	76.9 %

$\chi^2 = 5.46$ $P < 0.01$

(2) 寮生大会に対する態度行動

Table 7は、寮生の自治活動の一つである寮生大会に対する寮生の態度、行動とF得点変化との関係をみたものである。これは、寮生大会に対する態度、行動を六つのカテゴリー(好意的・活動的→非好意的・非活動的)に分類したものを、更に、「好意的・活動的」態度・行動を示すものと、それ以外のものとに大別して、これとF得点段階変化とを関連させたものである。

Table 7. 寮生大会に対する態度・行動とF得点段階変化

F ₂ -F ₁	態度・行動	好意的・活動的	「好意的・活動的」 以 外
	+・0 (上昇・不変群)		46.9 %
- (下降群)		53.1 %	50.0 %

有意差なし

表から明らかのように、この両者の間には全く差がないといってもよい結果であり、寮生大会に対する態度・行動は、F得点変化とほとんど関係がないということが出来る。

(3) リファレンス・グループ

寮生は大学生活の中で、一体どのような活動領域に最も意義を感じているであろうか。Table 8は、これを調べた結果である。便宜上4年寮生とそれ以外の寮生とにわけて表示した。ここで4年寮生というのは、F₁とF₂の比較可能なもののみであるため、「4年寮生」以外の方には、F₁の資料のない若干名の4年生及び医学部の5年次以上の学生、大学院学生なども含まれている。そのようなことも手伝って、4年寮生の方が、それ以外の寮生より正課の活動に最も意義を感じるものが少なく、学寮生活に意義を感じるものが多くなっているが、全体としては、有意差がある程ではない。

Table 8. 最も意義を感じている活動領域

活動領域	4年寮生	「4年寮生」以外	合計
正課の活動	35.7%	47.7%	42.0%
余暇の自由活動	19.0	13.0	15.9
学寮生活	16.7	4.3	10.2
文化サークル (研究会)	7.1	10.9	9.1
インフォーマル な交友関係	7.1	8.7	8.0
文化サークル (同好会)	2.4	4.3	3.4
その他	12.0	10.9	11.4

次にこの活動領域を「正課の活動」と「正課の活動以外」とに大別して、これとF

得点段階変化との関係を調べてみた。その結果は、Table 9 に示した通りである。上昇・不変群では、正課の活動に意義を認めるものの方が若干多くなっている程度であるのに対し、下降群では、学寮生活を含めて、正課以外の活動領域に意義を認めるのが非常に多くなっている。これは統計的にも5%レベルで有意な差を示している。即ち、大学生活の中でも、かなりインフォーマルな活動領域に意義を感じるものの方に、非権威主義的方向への態度変容を起すものが多いということが出来る。

Table 9. 最有意義活動領域とF得点段階変化

$F_2 - F_1$	正課の活動	「正課の活動」以外
+ (上昇・不変群)	73.3% (11人)	33.3% (9人)
- (下降群)	26.7 (4)	66.7 (18)

$$\chi^2 = 4.69 \quad P < 0.05$$

ところで、寮生が日常の大学生活をおくる上で最も重要視し、影響を強く受けていると思っているグループはどのようなものであろうか。回答によって寮生たちがそのようなグループとしてあげたものは、学寮の仲間、教室及び研究室の仲間、文化サークル(研究会、同好会)、家族、下宿や間借の仲間等が多かったが、「学寮の仲間」を最重要視したものが約半数あったため、特にこれを「学寮の仲間」と「学寮の仲間」以外のグループとに大別し、これとF得点段階変化との関係をみた。Table 10 がその結果である。「学寮の仲間」を最重要視するものの中には、上昇群に属するものが一人もいないということが明らかになったが、両グループとも大体同じような傾向を示しており、統計的には有意差が見られなかった。従って、学寮の仲間を最も重要視しているか否かということと、F得点段階変化との間には関係がないということが出来る。

Table 10. 最重要視グループとF得点段階変化

$F_2 - F_1$	重要視グループ	学寮の仲間	「学寮の仲間」以外
+ (上昇群)		0%	16.0%
0 (不変群)		53.0	28.0
- (下降群)		47.0	56.0

有意差なし

(4) 寮生活経験

寮生活の経験が生活体験として今後の社会生活に役立つと思うかどうかを評価させたところ、「非常に役立つ」35.7%、「かなり役立つ」47.6%、「あまり役立たない」14.3%、「全く役立たない」2.4%であった。これをF得点段階変化との関係でみたものがTable 11である。上昇・不変群も下降群も共に、寮生活経験が役立つと考えるものが圧倒的に多く、両群の間には全く差がみられない。従って寮生活経験を

有効であると考えるか否かは、権威主義的態度からの態度変容に直接の影響はもっていないといふことができる。

Table 11. 寮生活経験の評価とF得点段階変化

評 価	F ₂ -F ₁	+・0 (上昇・不変群)	- (下降群)
非常に役立つ		35.0%	40.9%
かなり役立つ		50.0	40.9
あまり役立たない		10.0	18.2
全く役立たない		5.0	0

有意差なし

次に、学寮生活経験とは別に、学寮生活の長さともF得点段階変化との関係をみてみた。その結果は Table 12 に示す通りであった。

Table 12. 寮生活経験の長さともF得点段階変化

F ₂ -F ₁	経験年数	3 年 未 満	3 年 以 上
+・0 (上昇・不変群)		65.0%	31.8%
- (下 降 群)		35.0	68.2

$$\chi^2=4.62 \quad P<0.05$$

この表は4年寮生 (F得点比較可能者のみ) についてみたものである。従って、経験年数3年以上というのは、4年間の大学生生活のほとんどを学寮で送ったものということになる。表から明らかなように、学寮生活経験が3年以上のものは、下降群に属するものが多く、3年未満のものは逆に上昇・不変群に属するものが多くなっており、両者の間には統計的にも有意な差が認められた。したがって、学寮生活経験の長いもの程、非権威主義的方向への態度変容をより多く示しているといふことが出来る。

以上は、入学時と卒業時のF得点比較可能な4年寮生のみについて調査した結果であるが、F₂の方は、同時に「4年寮生」以外の寮生全員にも実施していたため、寮生活経験と権威主義的態度との関係を調べてみた。

全寮生を学年別に分けてF₂得点の分布状態をみたところ、「4年寮生」の方が若干F₂得点が低い傾向がみられた。しかし、統計的に有意な差が出る程ではなかった。

そこで、寮生活経験年数を2.5年未満と2.5年以上とに分けてF₂得点との関係をみたところ、Table 13のように、寮生活経験年数の長いものの方がF₂得点が低いという結果が得られた。表示している通り、寮生活経験が2年半以上のものとそれ以下のものとの間には、統計的にも有意な差がみいだされた。即ち、経験年数2年半以下のものには、高得点群に属するものが約30%あるのに対し、2年半以上の経験を有するものの中には、高得点群に属するものが非常に少なく、逆に過半数が低得点群に属し

Table 13. 学寮生活経験の長さ と F₂得点 (全寮生について)

F ₂	経験年数	2.5年未満	2.5年以上
	高得点群		28.9%
中高得点群		21.1	16.0
中低得点群		7.9	24.0
低得点群		42.1	52.0

$$\chi^2 = 9.50 \quad P < 0.05$$

ている。

これらのことから、単なる大学生生活経験年数というよりは、その中での学寮生活経験年数の多少が、権威主義的態度の変容に大きく関係しているということが出来る。

要 約

1. この研究は、学寮生活の実態をとらえ、学寮が大学生の生活環境としていかなる教育的効果をもつものであるかを明らかにするため、Fスケール(権威主義的態度尺度)を用いて、学寮生活における社会的態度変容の実態と変容の要因を解明しようとしたものである。

2. 寮生の卒業時のF得点(F₂)は、入学時のF得点(F₁)に比して大巾に低得点へと変化しており、このF得点下降変化は一般学生より顕著である。したがって、学寮生活は大学生活の中でも特に非権威主義的方向へと社会的態度の変容をもたらしているということが出来る。(Table 1, 2, 3)

3. 学寮の凝集度や寮生大会に対する態度行動とF得点変化との間には、有意の関係がみられない(Table 5, 7)が、寮内における交友範囲の広いの方が、F得点の下降がいちじるしい(Table 6)。

また、大学生生活の中で、正課の活動に最も意義を感じている者よりは、学寮生活を含めて正課以外の活動領域に意義を感じているものの方が、F得点下降変化をより多く示している。(Table 9)

これらのことから非権威主義的方向への態度変容は、フォーマルな集団活動より、むしろ、比較的インフォーマルな集団活動ないし交友関係に、強く影響されていると考えられる。

4. 学寮生活に意義を感じているか(Table 8)、他の集団よりも学寮の仲間を重要視しているか(Table 10)、学寮生活経験を高く評価しているか(Table 11)、などといったものとF得点変化との間には直接的な関係をみることはできないが、学寮生活経験期間は、長い者ほどF得点が低くなっている(Table 12)。

これらのことから、学寮生活に対する意識や主観的評価とはほとんどかわりなく、学寮生活を送ること自体が、非権威主義的方向への態度変容をきたしているということが出来る。

5. 以上の諸結果から、学寮のもつ教育効果の一つとして、非権威主義的（民主的、反ファシズム的）方向への社会的態度の変容がみとめられる。しかも、この効果は主として、寮内に起居を共にすることから必然的に生じる、インフォーマルな人間関係に起因するものであると考えられる。

文 献

1. 藤沢・浜田：Fスケールによる人格の研究1（教育社会心理学研究2巻1号）
2. 篠原・佐藤：学寮に関する集団力学的研究（教育社会心理学研究3巻1号）

付（本調査にもちいたFスケール）

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--|--|----|----|----|----|----|----|---|--|---|---|---|---|---|--|---|---|---|---|---|--|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|----|----|----|--|--|--|--|--|--|
| <p>1. 科学が進歩しても、どうしても人間の精神では理解されない多くの重要なことが残るであろう。</p> | <table border="0"> <tr> <td>非</td><td>賛</td><td>や</td><td>や</td><td>不</td><td>非</td> </tr> <tr> <td>常</td><td></td><td>や</td><td>や</td><td>常</td><td>常</td> </tr> <tr> <td>に</td><td></td><td>や</td><td>不</td><td>に</td><td>に</td> </tr> <tr> <td>賛</td><td></td><td>賛</td><td>賛</td><td>賛</td><td>賛</td> </tr> <tr> <td>成</td><td>成</td><td>成</td><td>成</td><td>成</td><td>成</td> </tr> <tr> <td>+3</td><td>+2</td><td>+1</td><td>-1</td><td>-2</td><td>-3</td> </tr> <tr> <td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td> </tr> </table> | 非 | 賛 | や | や | 不 | 非 | 常 | | や | や | 常 | 常 | に | | や | 不 | に | に | 賛 | | 賛 | 賛 | 賛 | 賛 | 成 | 成 | 成 | 成 | 成 | 成 | +3 | +2 | +1 | -1 | -2 | -3 | | | | | | |
| 非 | 賛 | や | や | 不 | 非 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 常 | | や | や | 常 | 常 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| に | | や | 不 | に | に | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 賛 | | 賛 | 賛 | 賛 | 賛 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 成 | 成 | 成 | 成 | 成 | 成 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| +3 | +2 | +1 | -1 | -2 | -3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| <p>2. 自分の能力や周囲の事情からみて、極めて困難なことも意志の力さえ充分であれば、やりとげられないことはない。</p> | <table border="0"> <tr> <td>+3</td><td>+2</td><td>+1</td><td>-1</td><td>-2</td><td>-3</td> </tr> <tr> <td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td> </tr> </table> | +3 | +2 | +1 | -1 | -2 | -3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| +3 | +2 | +1 | -1 | -2 | -3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| <p>3. 親や先生の言うことをよくきき、尊敬するということは子供の学ぶべき最も重要な徳目である。</p> | <table border="0"> <tr> <td>+3</td><td>+2</td><td>+1</td><td>-1</td><td>-2</td><td>-1</td> </tr> <tr> <td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td> </tr> </table> | +3 | +2 | +1 | -1 | -2 | -1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| +3 | +2 | +1 | -1 | -2 | -1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| <p>4. 人は何か超自然的な力に決定されて生きていくに違いない。</p> | <table border="0"> <tr> <td>+3</td><td>+2</td><td>+1</td><td>-1</td><td>-2</td><td>-3</td> </tr> <tr> <td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td> </tr> </table> | +3 | +2 | +1 | -1 | -2 | -3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| +3 | +2 | +1 | -1 | -2 | -3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| <p>5. 問題や悩みがある時には、そのことを考えずに何か面白いことで、気をまぎらすようにするのがいちばんよい。</p> | <table border="0"> <tr> <td>+3</td><td>+2</td><td>+1</td><td>-1</td><td>-2</td><td>-3</td> </tr> <tr> <td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td> </tr> </table> | +3 | +2 | +1 | -1 | -2 | -3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| +3 | +2 | +1 | -1 | -2 | -3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| <p>6. よい礼儀作法・習慣・しつけの身につけている人と、そうでない人とでは、そこに大きな違いがあるので、つきあってもうまく行くものではない。</p> | <table border="0"> <tr> <td>+3</td><td>+2</td><td>+1</td><td>-1</td><td>-2</td><td>-3</td> </tr> <tr> <td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td> </tr> </table> | +3 | +2 | +1 | -1 | -2 | -3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| +3 | +2 | +1 | -1 | -2 | -3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| <p>7. 若い人に最も必要なものは、厳格な訓練と強い決断力と、家族や国のために大いに働くという意志である。</p> | <table border="0"> <tr> <td>+3</td><td>+2</td><td>+1</td><td>-1</td><td>-2</td><td>-3</td> </tr> <tr> <td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td> </tr> </table> | +3 | +2 | +1 | -1 | -2 | -3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| +3 | +2 | +1 | -1 | -2 | -3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| <p>8. 人の名誉を傷つけたものは必ず罰せられなければならない。</p> | <table border="0"> <tr> <td>+3</td><td>+2</td><td>+1</td><td>-1</td><td>-2</td><td>-3</td> </tr> <tr> <td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td> </tr> </table> | +3 | +2 | +1 | -1 | -2 | -3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| +3 | +2 | +1 | -1 | -2 | -3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

9. 若い人達は、時々反抗的な考え方をすることがあるが、成人するにつれて、そういう考え方に打ちかって、おちつくようになるべきである。

+3 +2 +1 -1 -2 -3
| | | | | |

10. 子供を襲うような性的犯罪者は刑務所にいれるくらいではたりない、公衆の面前で鞭打つか、もっとひどい目にあわせるべきだ。

+3 +2 +1 -1 -2 -3
| | | | | |

11. 人ははっきり二つの種類にわかれる。弱いものと強いものである。

+3 +2 +1 -1 -2 -3
| | | | | |

12. 両親に対して深い愛情や感謝や尊敬を感じない人ほど下等な人はないだろう。

+3 +2 +1 -1 -2 -3
| | | | | |

13. 戦争や社会的ないざごさは、そのうちに全世界を破壊するような地震や洪水によって終りになるだろう。

+3 +2 +1 -1 -2 -3
| | | | | |

14. 不道德なことを平気でやるものや、何でもひねくれて解釈する者や、低脳な者などを何とかしてなくすることができれば、たいいていの社会的な問題は解決されてしまうものだ。

+3 +2 +1 -1 -2 -3
| | | | | |

15. 表面的にはどのようにふるまうとも、男はただ一つの理由から女に興味を持つ。

+3 +2 +1 -1 -2 -3
| | | | | |

16. 口でいうことは少くしてよけい働けば、誰でももっとよい暮しができるようになる。

+3 +2 +1 -1 -2 -3
| | | | | |

17. たいいてい人はそれに気づかないだけで、われわれの生活は、かくれたところでしくまれた計略によって動かされていることが多いものだ。

+3 +2 +1 -1 -2 -3
| | | | | |

18. 実業家や製造業者の方が、芸術家や先生よりも、社会にははるかに重要である。

+3 +2 +1 -1 -2 -3
| | | | | |

19. 精神の異常でない、よいしつけの人が、親友や親類の者を傷つけるなどということは、とても考えられないことである。

+3 +2 +1 -1 -2 -3
| | | | | |

20. 苦しまずに、真に重要なことを学んだものは一人もいない。

+3 +2 +1 -1 -2 -3
| | | | | |